

るが、本書は、緻密なフィールドワークに基づく地理学研究の面白さや、島という限定された空間だからこそ可能となる詳細な分析とそこから得られる新たな知見がある。どの章を読んでも様々な発見が詰まっている良書である。改めて、一読をお勧めしたい。

さて『離島研究』シリーズの読者の中には、自らも島に足を運んでみたい（できれば自分の専門を生かした調査もしてみたい）と考える人も多いだろう。また『離島研究』所収の詳細な論考を読む際に、その島の位置や形状、歴史的背景や人口、主要な産業などの全体像を把握したいという場合もあるだろう。そのような場合に有益な情報を提供してくれるのが、平岡・須山・宮内編の『図説日本の島 - 76の魅力ある島々の営み -』である。本書は朝倉書店から出版されている図説シリーズの一書で、本書は、いわば日本の島のカタログ的な書籍である。一つの島が2ページまたは4ページにコンパクトにまとめられ、島の全域を納めた地形図と豊富な写真、島の特徴を簡潔にまとめた文章で島の概要を知ることができる。本書を眺めながら、どこへ行こうか、どんなところか、と考えているだけで、日常の雑務を忘れて旅行気分になることもできる。島に興味を持つすべての人にお勧めの一冊である。

文 献

平岡昭利・須山 聡・宮内久光編 (2018) : 『図説日本の島 - 76の魅力ある島々の営み -』朝倉書店, 2018年10月刊, 192p.

(平井 誠)

山下清海 : 『世界のチャイナタウンの形成と変容 - フィールドワークから華人社会を探究する』明石書店, 2019年2月刊, 328p., 4,600円 (税別).

華人に関する研究において、チャイナタウンは重要な研究対象であり研究も少なくないが、多くの研究は一定の国または地域に限られている。このような状況に対して、グローバルな視点からチャイナタウンを比較して類型化するのが本書の狙いである。筆者が知る限り、時間軸から言っても空間軸から見ても、本書の著者である山下清海氏ほど世界のチャイナタウンを長く広く研究する研究者は他にいない。本書は、著者が40年あまりかけて世界各地のチャイナタウンを研究してきた集大成と言える。

本書は序論、ケーススタディ、結論の3部から構成されている。

第1部の「序論」で研究の視点と方法を定めたうえで、第2部のケーススタディでは米国、フランス、ブラジル、インド、モーリシャス、マレーシア、ラオス、韓国、日本のチャイナタウンを対象として、世界に広く分布する事例を詳細に考察する。第3部で時間軸とチャイナタウンの特徴という枠組みで世界に広がる個別事例の特性と規則を探り、本書の研究価値を高めている。

まず、第1部では、チャイナタウン研究において、著者は「地理学的視点」の見方と世界各地の「華人社会の地域特色」を重視する重要性を強調する。「地理学的視点」とは、著者曰く、華人社会研究に対する地理学的特色をアピールすることは、地理学の社会的地位の向上にとっても必要不可欠である。そこで、社会現象や社会問題を研究対象とする社会学と区別して地理学的な研究アプローチは、チャイナタウンの立地・形成・構造・景観などについて総合的に考察する。加えて、世界各地における華人社会の地域的特色とその背景

を究明する地誌学的アプローチも重要であると著者が理解している。また、著者が長年にわたって蓄積してきた研究成果において重要な発見とも言えるのは、世界各地にみられるチャイナタウンの形成過程から、都市の中心部に分布する「伝統的なチャイナタウン」（オールドチャイナタウン）と郊外に立地する「新しいチャイナタウン」（ニューチャイナタウン）の2種に類型区分できることである。

第2部の事例研究は10章から構成されている。40余年研究してきた数多くの対象から厳選された10カ所のチャイナタウンには、著者が華人社会の地域的特色とその背景を究明する地誌学的アプローチを重視する意図が反映されている。最初に紹介されたサンフランシスコ（IV章）とニューヨーク（V章）は、いずれもアメリカの事例である。移民大国のアメリカは、著者が修士論文で横浜中華街を研究するきっかけとなったR. Murphey（1952）とS. Chang（1968）などのいち早く華人研究を注目した国だけでなく、著者が新しい郊外型チャイナタウン（ニューチャイナタウン）を発見した国でもあり、チャイナタウン研究の源と最新の潮流が共存する国とも言えよう。世界における華人の流れは故郷の僑郷から現在の居住地までという単一のパターンでなく、時代に影響を受けて非常に複雑である。ヨーロッパの代表事例としてのパリの三つのチャイナタウン（VI章）の形成がインドシナ系華人との関係が強いことは、著者が単なるチャイナタウンの景観を分析することに止まらず、華人社会の背景と繋がりまで究明する洞察力による発見とも言える。また、パリのチャイナタウンと南米のブラジルのサンパウロのチャイナタウン（VII章）には、それぞれユダヤ人街と東洋街からチャイナタウン化するのが共通点である。華人は時代に翻弄されながらも辿り着く先に粘り強く住み着く。中国と国境紛争が

あったインド（VIII章）においても、インド洋で最初に華人が現れたモーリシャス（IX章）においても、チャイナタウンが形成されたにも関わらず、華人そしてチャイナタウンに関する研究は皆無に等しいほど非常に乏しい。著者のフィールドワークによるこれらの研究はチャイナタウン研究の空白を埋めている。そして、華人人口が最も集中している地域は東南アジアと言われており、東南アジアにおける華人研究も非常に盛んでいるが、華人社会に関する研究が最も乏しい国のラオスのチャイナタウン研究（XI章）も同じく研究の空白を埋めることで価値が高い。さらに、華人社会と政治との関係に着目して考察したのはマレーシアの事例（X章）である。

XII章の研究対象は中国の隣国でありながら華人が少なく、華人の経済・社会的な地位が低かった韓国のチャイナタウンである。韓国は、2000年ごろまで主要な国でチャイナタウンが存在しない数少ない国の一つであり、華人社会そしてチャイナタウンに関する情報も研究も非常に限られていた。韓国のチャイナタウンを研究するきっかけは、著者がサンフランシスコでの在外研究の時に、キャンパス周辺に集中している20数軒の中国料理店であった。どこにいても華人社会に強い関心をもちながら華人社会の背景を究明する姿勢が、著者が新しい社会現象を発見する原点でもある。さらに、1970年代に韓国からアメリカなどの国に移住した華人は、1962年以降の社会主義政策下のビルマ（現ミャンマー）、1962年の中印国境紛争により中印関係が悪化したインド、1970年代の社会主義化に伴う華人が海外脱出したインドシナ諸国などとの共通点として、著者が「自国経済の土着主義的な政策に伴う華人経済の衰退化」と一般性をまとめている。このように、フィールドワークでは常に鋭い問題意識をもち、数多くの事例を蓄積してきた成果として、チャ

イナタウン研究において著者が融通無碍の状態に達していると言えよう。時代が変わり、近年、ニューカマーと呼ばれる新華僑と地元社会との間にコンフリクトも生じており、このような新しい社会現象と問題を取り扱うのは我々の身近に存在する東京・池袋チャイナタウンの事例（XⅢ章）である。

第3部の結論では、著者が40年余り研究してきた世界のチャイナタウンを集大成として類型化する。「地理学的視点」と「華人社会の地域特色」を強調する発想に基づき、①チャイナタウンが立地する場所の特色、②チャイナタウンで生活する住民の特色、③チャイナタウンの景観の特色、④チャイナタウンが有する機能の特色、の四つの指標を抽出し、時間軸の新旧（オールドチャイナタウン、ニューチャイナタウン）に掛け合せて類型化する。オールドチャイナタウンには旧来型と観光地型の2種、ニューチャイナタウンにはダウンタウン型、住宅・商業型、高級住宅型、モール型

の4種に細分し、それぞれの代表例を示す。

著者のチャイナタウン研究は修士論文の横浜中華街研究から始め、シンガポールの南洋大学での留学を機に研究範囲を東南アジアに広げ、カリフォルニア大学バークリー校での在外研究でアメリカの新しい郊外型チャイナタウンに気が付いた。フィールドワークを重要視してグローバルスケールで世界のチャイナタウンを比較して考察することは、研究テーマの確定に悩む研究者、とくに研究を志す若者にとって良い教科書にもなりうる。フィールドノートには詳細に記録すること、原稿はできるだけ現地で書くこと、調査結果をフィールドワークで地図化すること、フィールドワークから新たな研究アイデアの発見などは、フィールドワークの重要性を物語るだけでなく、著者が重宝してきたフィールドワークの重要な技法であり、調査法として研究者にとって学ぶべき点が非常に多い。

（杜 国慶）